客家（Hakka）世界大会の歴史的推移

中川學

一　世界の客家とその組織

客家（Hakka）とよばれる中国人の一群は、中国本土の県境と省境をこえ、国境をわたって海外へ移住し、華僑あるいは華人の一集団として、[1]世界各地で活躍している。

五胡十六国の時代に、北方遊牧民族に圧迫されて東遷した晋王朝の漢民族は、その後、遼・金・元との抗争の過程で、迫られて民族的自覚を高めていった。[2]

「中華」の文化主体としての意識が形成され、対極概念としての「夷狄」に対する抵抗力が増す一方、モンゴル軍に圧迫されて華南の山間地帯に拠点を構築する過程で、この漢民族の一群は、ミャオ族、ヤオ族、トン族などの非漢民族との抗争・融和を体験し、福建・広東両省の先住漢民族と鎬を削ることになった。[3]

このような社会的摩擦のなかで、彼らは、統一的意志をもつ集団に練成され、先住の土着民社会と区別して、外来の客民、という意味で、「客家」とよばれるようになった。それを「Hakka」と発音するのは、彼らを警戒する広東人の方言によるのであるが、いいかえれば、「客家」の統合過程は、「夷狄」に対する「中華」の自覚にせよ、「土着」に対する「客住」の自己認識にせよ、外側から迫られたものであった。

その自覚的統合の核をなしたものは、血縁であったのだろうか、あるいは、地縁であったのであろうか。いずれでもなく、言語であり、礼俗という形の文化体系であ

った。

すでに、県境をこえて移動し、省境にまたがって自衛集団を形成することにより[4]、狭く閉ざされた地縁社会の統合原理は乗りこえられざるをえなかった。また、血縁的統合は、サブ・システムにとどまり、各地に散居する客家の同族を同姓集団として結びつける機能は果したとしても、客家全体を対立者から防衛する統合原理としては不足であった。

江西、福建、広東、広西、四川等、それぞれ固有の地縁的言語圏を構成する諸省にまたがって、横断的な客家社会が形成されたのは、太平天国の革命運動以後のことである[5]。各省各地の方言の影響をすくなからず受けながらも、横断的な共通語として、客家語が守り通されたことが、客家の文化的統合を内側から可能にしたのである[6]。

このようにして、漢民族のなかの一部の集団が、外部からの圧迫と分断に耐え、共通の言語を核としながら「中華」的文化統合を実現しつつあった時代、一九世紀中葉は、同時に、中華にとっての「夷狄」が、北方遊牧民族のみならず、西ヨーロッパ、アメリカ、ロシア、日本等、近代的な国民国家群へと拡大していった時代でもあった。しかも、その時、客家は、飢餓線上をさまよいながら、クーリーとして、あるいは単身冒険の出稼ぎ労働者として、国境をこえ、海を渡り、東南アジア、ハワイ、アメリカ、ラテンアメリカ、アフリカ等、世界各地へ、就職機会の見つかるまで行進するほかなかったのである[7]。

ともすれば、客家史は、立志伝や成功譚として語られがちである。たしかに、マレー半島では葉亜来がクアラルンプールを開き[8]、インドネシアでは羅芳伯がアジアで最初の大統領制共和国の雛型をつくり[9]、タイのバンコク王朝は鄭昭が建てもした[10]。さらに、第二次大戦後、民族解放の潮流のなかで、独立したトリニダードの初代大統領何歳、同じくガイアナの鍾亜瑟、ビルマのネ・ウィン首相、シンガポールのリー・クワンユー首相をはじめ、アジアやラテン・アメリカ諸国の希望の星となった客家系華人はすくなくない。

これらの指導者が成功したのは、彼らが客家民衆の輿望をにない、期待にこたえたからにほかならない。歴史的な人物評価の底にある民衆社会の世論に沿っているかぎりにおいて、彼らは尊敬もされ、語り伝えられもする

表1　世界の客家人口

1950年代	1960年代	1970年代	1980年代及び年代不明	備　　考
		40,000,000		1970年の資料 (a)
		1,700,000		1970 (a)
	368,000		400,000	1962 (a)
	58,000			1962 (c)
		4,000	5,000	1972 (a), 1980 (d)
300,000				1950 (a)
	150,000			1962 (c)
62,263	96,000			1947(c), 1956(c), 1962(c)
			30,000	
	530,000			1931(c), 1947(c), 1962(b)
	350,000			1931(c), 1947(c), 1962(b)
476,700	550,000			1950 (a), 1962 (b)
	5,000±α			1962 (b)
3,500				1950 (a)
	1,250			1962 (b)
			11,000	(a)
			1,000	(a)
	10,000			1948 (a), 1962 (a)
	10,000			1962 (a)
			4,000	(a)
			20,000	(a)
		800		1974 (e)
			5,000±α	(a)
			5,000	(a)
			5,000±α	(a)
		2,000	2,000	1974 (e)
			5,000±α	(a)
	24,000			1962 (b)
	500±α			1962 (b)
	5,250	30,000		1962 (a)
10,000	13,800			1945(c), 1950(a), 1962(c)
		25,000		1970 (a)
			18,000	(a)

『客家人』台北，1978。(b) 郭壽華『客家源流新志』台北，1963。(c)『槟榔嶼客属公会四十週年記念刊』ペナン，表報告」バンコク，1982。(e)『世界客属第二次恳親大会实録』台北，1974。

	1930年代	1940年代
中国（大陸）		
中国（台湾）		
香港		
マカオ		
日本		
タイ		
ビルマ		
ベトナム		57,189
カンボジア		
マレーシア	217,697	437,407
シンガポール	19,317	40,036
インドネシア		
フィリピン（マニラ）		
ティモール		
インド		
オーストラリア		
ニューギニア（ラバウル）		
アメリカ（本土）		15,000±α
ハワイ		
バナマ		
ジャマイカ		
トニリダード		
キューバ		
ガイアナ		
スリナム		
ブラジル		
ベルー		
イギリス		
オランダ		
カナダ		
アフリカ（南ア）		9,396
モーリシアス		
レユニオン		

註 備考欄の年号は，資料の該当年度。（ ）内は出所：(a) 陳運棟 1979。(d) 邱進福「世界客風総会第六次懇親大会日本崇正総会代

のである。そのような世論の主体としての客家人が、現在、世界各地のどこで、どのくらい活動しているのかを知るよすがとして、人口統計を集約すれば、表1のようになる。推定人口には諸説があって一致しないし、厳密な数値は望めないが、概数として、世界の客家総人口は約五千万人弱であり、そのうち中国大陸と台湾に約四千余万人が居住し、海外華僑ないし華人として約七百余万人が各国に分布していると見てよいであろう。(11)

参考までに、遊仲勲氏の整理された世界の華僑人口は、表2の通りである。1・2両表を対照すれば、華僑・華人の平均三割弱が客家人であり、その比率は国によってかなり異なっているといえる。たとえば、ジャマイカやモーリシアスでは、その地に僑居する華人の殆ど全てが客家系であり、パナマやティモールでは約三分の二を客

(台湾側の推定)

地域	華僑人口
オセアニア	
オーストラリア	19,800
ニュージーランド	11,000
ソシエテ諸島	6,948
フィジー群島	4,943
濠州領ニューギニア	3,000
ナウル	800
サモア群島	108
オセアニア計	46,599 (0.26%)
アフリカ	
モーリシアス	23,266
マラガシ	8,045
南ア共和国	8,000
モザンビーク	3,500
レ・ユニオン	3,000
リビア	500
アンゴラ	500
タンザニア	420
ローデシア	300
ケニア	150
ウガンダ	70
エチオピア	55
リベリア	29
アラブ連合	27
コンゴ(キンシャサ)	11
モロッコ	9
コンゴ(ブラザビル)	8
ナイジェリア	3
カメルーン	2
マラウイ	2
ガボン	1
アフリカ計	47,898 (0.27%)
ヨーロッパ	
イギリス	50,000
フランス	3,000
オランダ	2,353
ソ連	1,236
ドイツ(東西?)	1,200
デンマーク	900
ベルギー	565
イタリア	312
スペイン	279
ポルトガル	172
スイス	120
チェコスロバキア	96
ポーランド	88
オーストリア	30
スウェーデン	24
ギリシア	16
ルクセンブルグ	10
ノールウェー	3
ヨーロッパ計	60,404 (0.34%)
世界計	17,978,924 (100.00%)

(出所)　華僑経済年鑑編集委員会編『華僑経済年鑑』, 1967年版, 台北。
付：華僑人口分布図による。
遊仲勲『東南アジアの華僑』1970を一部修正したもの。

表2 世界の華僑人口

地域	華僑人口	地域	華僑人口
アジア		南北アメリカ	
タイ	3,799,000	合衆国	264,807
香港	3,710,000	カナダ	74,000
マレーシア	3,388,324	キューバ	24,000
内訳(マラヤ	2,996,324)	ペルー	24,000
(サラワク	282,000)	ジャマイカ	20,947
(サバ	110,000)	トリニダド	15,000
インドネシア	2,750,000	ブラジル	11,630
シンガポール	1,427,000	パナマ	7,960
南ベトナム	1,115,944	蘭領スリナム	7,000
ビルマ	400,000	グァテマラ	5,200
カンボジア	260,000	メキシコ	5,085
マカオ	160,764	英領ギアナ	5,000
フイリピン	115,501	エクアドル	4,064
インド	53,252	ベネズエラ	4,000
日本	49,431	チリ	4,000
同(沖縄)	1,859	コスタリカ	3,000
ラオス	46,830	コロンビア	2,000
南朝鮮	28,927	ドミニカ	1,600
ブルネイ	21,795	ニカラグア	1,500
サウジアラビア	14,000	ホンジュラス	860
ポルトガル領チモール	5,568	仏領カイエンヌ	500
トルコ	3,078	クラカオ	406
クリスマス島	2,100	サルバドル	400
パキスタン	1,700	アルゼンチン	380
セイロン	734	アルバ	220
アフガニスタン	28	ハイチ	204
イラン	17	ウルグアイ	151
ヨルダン	11	ボリビア	113
イラク	9	バルバドス	100
レバノン	9	パラグアイ	15
アジア計	17,335,881 (96.42%)	南北アメリカ計	488,142 (2.72%)

家が占める。逆に、広東系、福建系、潮州系など、他の地域グループ（郷帮）に属する華僑にくらべて、客家が著しく少いか皆無の所も目立つ。

このような分布の疎密が生じた社会経済史的理由は、各国別に分析すべき課題として今後に残すが、一般論としては、移動を組織した帮の職業傾向によって説明されてきた。たとえば、福建帮は海上商人型で輸送労働に従事し、アジアを中心とする各国の港湾都市にいちはやく移住し、上海系の三江帮は商業資本家が多く香港や長崎へ、福州帮は呉服雑貨の行商人としてインドネシアの奥地にまで入り、潮州帮は食料品商としてタイやベトナムに拠点をかまえ、広東帮はプランテーションや鉱山の労働者としてオーストラリアや南北アメリカへも渡ったが、客家帮は、広東帮型の生産労働に加えて技能職にすぐれ、教師・医師・弁護士等の資格をとって各国の首都でも活躍するようになった、と見られている。[12]

これらの郷帮が、それぞれ同郷・同業・同姓のギルド的な相互扶助組織をもっていることは、周知の通りである。[13] とりわけ客家帮は団結の固いことで知られている。たとえば、シンガポールのばあい、総人口約二三〇万人の七六％にあたる約一七五万人の華人のうち、客家人は、海南人とほぼ同数の約十二万人であり、福建人（七八万人）、潮州人（四十万人）、広東人（三十万人）にくらべて少数派であるにもかかわらず、リー・クワンユー首相の出身基盤となっている。その理由の一つは、他の郷帮にくらべて、客家の相互扶助組織が多彩で活発に機能していることを挙げねばなるまい。

シンガポール華人の宋明順氏も指摘しているように、シンガポール客家人の社会組織には、大別して次の三種類がある。[14]

（1）　地縁団体

応和会館（嘉応州五県＝梅県・蕉嶺・五華・興寧・平遠）、茶陽会館（潮州府大埔県）、永定会館（福建省永定）、豊順会館（潮州府豊順県）、恵州会館（広東省恵州府十県＝恵陽・博羅・龍川・河原・紫金・海豊・陸豊・和平・連平・新豊）、南洋上杭同郷会（福建省上杭・汀州）、豊永大公司（豊順・永定・大埔三県連合）、嘉応五属同郷会、嘉僑同郷会、興寧同郷会、南洋五華同郷会（以上四団体は嘉応州の一県単位）、武吉班諒客属同郷会（シンガポール Bukit Panjan 地区）等。

（2） 血縁団体

藍氏公会、客属黄氏公会、南洋客属陳氏公会、客属劉氏彭城公会、嘉応張氏公会、客属林氏公会、客属廖氏公会、南洋羅氏公会、南洋范氏公会、南洋頼氏公会、南洋楊氏公会、茶陽何氏公会、南洋莒郷陳氏公会、客属徐氏東海堂、南洋客属宝樹同宗社、等。

（3） 親睦団体

和商互助会、崇僑互助社、松善互助社、茶陽励志社、東南倶楽部、新生聯誼社、同声倶楽部、晏湖倶楽部、等。

以上の諸団体は、同業種の構成員を中心とする業縁組織の機能をあわせもつ。それらのすべてに共通するのが客家語であり、戴国煇氏にならっていえば、語縁団体としての大団結が成立している。すなわち、地縁・血縁・業縁の団体をサブシステムとして包括する、語縁的な文化統合体が「南洋客属総会」として聳え立ち、大きな会館を共有している。[15]

このような組織が、世界中、客家人の生活圏には必ず結成されており、相互に国境をこえた協力のネットワークを築きあげ、その頂点あるいは中心として、「世界客属総会」が活動しているのである。

二 世界客属総会の形成と懇親大会

客家の世界組織、「世界客属総会」は、一九七一年九月二九日、「香港崇正総会」の創立五十周年（金禧）を記念して、香港で開催された第一回の世界客属懇親大会に始まり、二年に一度、これまでに六回開かれている。その推移は、以下の通りである。

第一回、一九七一年九月、香港。香港崇正総会主催、世界各国・各地区の代表四九団体、一千人をこえる代表が参加した。[16]

第二回、一九七三年十月、台北。台北市の中原客家聯誼会主催。台北市中山堂中正庁において十月五、六、七日にわたって行われ、台湾から一三〇〇余人、海外から七〇〇余人、四十余団体の各国・各地区代表が参加した。[17]

第三回、一九七六年十月、台北。当初、バンコクにおいてタイ国崇正総会の主催で行われる予定であったが、中国をめぐる国際関係の変化にともない、開催地を台北市とし、世界客属総会の主催に変更された。[18]

第四回、一九七八年九月、サンフランシスコ。「旅美三藩市崇正会」の創立五十周年を記念して同会が主催、

米国の会員千人余と世界各地の客属八百余人が参加した。[19]

第五回、一九八〇年十月、東京・大阪。在日客属五千人から成る日本崇正総会が主催、海外から千人余の代表を迎えて挙行された。開会式ならびに総会は、東京崇正公会ならびに東京崇正協同組合の本部がある東京で催され、閉会式は、関西崇正公会が主宰して宝塚市で行われた。[20]

第六回、一九八二年九月、バンコク。タイ国客属総会が主催し、バンコク市建都二百周年を記念して、十数か国、百余団体、一千六百余人の参加のもとに挙行された。[21]

そして、次の第七回総会は、一九八四年にシンガポールで開催される予定であり、前述の南洋客属総会が目下その予備的検討を進めている。

私が参加したのは、第五回と第六回の両大会であるが、在日本客属の代表的知識人・戴国煇氏の高配により、[22]日本崇正総会（邱添寿会長）ならびに東京崇正公会（邱進福会長）のあらゆる行事に参加の機会を与えられ、その見聞にもとづいて本稿をまとめている。就中、邱進福会長に随行して、第六回バンコク大会に参加し、バンコク、シンガポール、香港、台北を歴訪しながら、同会長から日夜教示をあおいだことは特記せねばなるまい。[23]のみならず、その道中、旧知のシンガポール客家社会のリーダーである頼開龍氏（嘉僑同郷会主席、南洋客属総会ならびに応和会館理事）と氏の総領頼亜僑君（元・一橋大学留学生）に再会して種々聴聞し得た事実も、本稿の素材となっている。勿論、それらを整理し、文献史料の伝える史実に関する私なりの判断とあわせて、[24]ここに記す一文の責任が私自身に帰することは当然であり、大方の叱正を受けることができるならば幸甚である。

三　過去――対決の時代の世界大会

一九七一年九月、香港で最初の世界客家大会が催される前後、北京とワシントンの雪どけが始まっていた。七月には、ニクソン訪中の計画が明らかにされ、十月には、キッシンジャーが北京入りして周恩来と会談した。いわゆるピンポン外交が、北京・ワシントン・東京の三極の接近をつよめ、相対的に、香港・台北の不安をつのらせていたのである。

そして一九七二年、第二回の世界客家大会が十月に台北で開かれた時には、すでに、田中内閣の日本国は、中

華民国から中華人民共和国への外交転換を遂げていたのであった。

国家と国家の権力的な関係の激変のはざまにあって、客家系中国人は何を考えていたのであろうか。彼ら、また、纏足をせず労働にいそしんできたことで知られる客家婦人の彼女らは、[25] とうの昔に国家利害のあさましさを見抜き、権力的な価値規準を乗りこえていた。[26]

客家人の彼らと彼女らは、こよなくラブ・ソングを愛し、祖先伝来の山歌を口ずさむことによって、幾多の艱難辛苦を克服してきた。[27]「ラブ・イズ・ア・メニー・スプレンダード・シング」の主題歌で世界を風靡した「慕情」のハン・スーイン女史が、客家系の国際人・世界市民といわれるように、[28] 客属の文化伝統は、しだいに客家をも超えようとしている。リー・クワンユー首相が、みずから客家と名乗ることもせず、中国人とか華僑・華人とかいうレッテル貼りも拒み、ただ「シンガポーリアン」だとしか言わないことは、よく知られている。県境をこえ、省境をこえ、国境をこえてきた客家である。行きつくところは、とりあえず「人類」しかなさそうだ。

事実、激変する政治状況のなかで結成された香港崇正総会 (Tsung Tsin Association, Hong Kong) は、その会章を定めるにあたって、国連と同じように地球を中心に据え、そこに世界地図を線描きして、「崇正」(正義を尊び、邪悪を糾す) の二文字を入れ、金色の勝利に輝く盾形の縁取りで囲むことによって敢然たる勇気を表現することにした。全体の色彩は、藍・白・紅の三色とし、それぞれ「自由・平等・博愛」を象徴させたのである。[29]

この図案は、客家出身の客家史家、香港大学教授、故羅香林氏の提案によるもので、その解釈は、初代理事長黄石華氏によって定められた。地球の図柄は、太陽と同心円状に描かれ、二十四条の放射状光線がほとばしっているが、それは、四六時中、進歩をもとめて回転するさまと、太陽の照る所、中国人の居る処、世界中くまなく客属が活躍していることを示すのである。

自由、平等、博愛、という、フリーメーソンからフランス革命に受けつがれ、[30] アメリカ独立をささえ、羅芳伯のアジア的大統領制を生み出した理念、近代の幕あけに「人類」の方向づけをした価値規準が、客属の香港崇正総会にとっての理想となった。その理想の前には、「客家」に執着する必要なし、という理由で、会名に客家・

客属等の文字を採入れないことも決定されたのであった。[31]

理想と現実との緊張関係は、人の世の常である。一九七一年という国際政治の転換期において、香港客属の直面した政治的現実は、人類的崇正の理想と隔ること雲泥の差があったと思われる。その落差を、客家人は、政治的に、ではなく、文化的・歴史的に埋めようと努力した形跡がある。

さかのぼれば、清朝光緒三一年（一九〇五）から民国九年（一九二〇）にかけて、中国では、客家は漢民族なりや否やとの論争がたたかわされていた。ついに、一九二〇年、イギリス人ウォルコットの編んだ『英文世界地理』を上海の商務印書館が出版したところ、書中に「山地には客家のような野蛮な部落が多い」と記されていたことから、客家人士の糾弾の声がまきおこり、北京・上海・広州・香港にまたがる客家の連帯を生み、一九二一年九月二九日、「旅港客属代表大会」が開催される運びとなった。このようにして、蔑視と差別への抗議のなかから、客家人のアイデンティティを求める集団活動が生まれてきたのである。[32]

やがて、それは自衛と相互扶助のための「旅港崇正工商総会」となり、一九二六年には、範囲を拡げるために「工商」の二字を削除して「崇正総会」と改め、戦後、ヒューマニズムの自覚に立って、旧会章の万（卍）字を廃止して前述の羅香林デザインに切りかえたのである。それが一九六八年、大陸に文革の嵐が吹き荒ぶ時代のことであった。

この新しい会章は、会旗ともなり、世界各地の客属の注目をあつめた。まず、米国各地の同胞がこれにならい、世界組織をもとめる声がたかまってきた。お互いに自己のアイデンティティとルーツを確認する意欲に動かされて、会誌を発行し、系譜・族譜を印行し、奨学制度を設けるなどして団結をつよめてきたが、香港崇正総会が創立五十周年を迎えるのを機に、世界客属の懇親大会を開こう、ということになった。

当時から香港崇正総会の指導者であった黄石華氏は、率先して世界各地の崇正会を歴訪し、共産主義・三民主義・反共主義、等、いかなる主義にもとらわれず、客属郷親の親睦のための大会の意義と必要性を遊説して歩いた、という。

その結果、前述のように、第一回大会が実現したので

あるが、当時の政治状況は、黄石華氏の、政治に介入せず、との理念に反して、親共か反共か、という二者択一的な態度決定を迫り、迂余曲折を経て、反共の旗色を鮮明にした香港中原客属総会の何貫虹会長が、台北市の中原客属聯誼会と結んで、第二回台北大会を準備する。その当時、台湾全体の崇正会は結成されていなかったので、台北市の同会が台湾を代表し、大会を実現した。この大会において世界客属総会の規約が採択され、中原聯誼会の翁鈞会長が、世界客属総会の会長に選出された。

翁鈞氏は、台湾客属三百万人の中での出世頭といわれ、内政部長（内務大臣）をつとめた人である。いうまでもなく国民党の三民主義路線のリーダーであり、香港の黄石華氏との隔たりはそれだけ大きくなった。

この台北大会で、次期開催地はバンコクと決まったものの、タイの外交事情の急変によって開催不可能となり、総会で再審議したところ、総会が経費を負担して台北で開催することになった。こうして、反共の政治色が一段とつよまるにいたったのである。

この対決ムードは、第四回サンフランシスコ大会によって和らげられることになるが、世界客属総会の生みの親と慕われる黄石華会長は、サンフランシスコと東京大会には団長として参加したにもかかわらず、最近の第六回バンコク大会には欠席し、しかも、バンコク大会終了直後の一九八二年九月二九日、あの旅港崇正会創立記念日に、香港で独自の懇親大会を敢行したのである。[33] 何故であろうか。

四　現在――共存と統一への摸索

一九七八年九月、サンフランシスコにおいて第四回の世界客属懇親大会が開催されることを知りながら、私は、在米研修をきりあげて帰国の途につかねばならなかった。当時の米国は、中国東南部の海底油田が有望視されるようになったこともあって、人民服の石油化学技術者訪米団が各地で歓迎されるかと思えば、ボストンの中華街には反共スローガンが急増したりもしていた。

その夏に、ワシントンのウッドロー・ウィルソン研究所の特別客員研究員としての任期を全うされようとしていた小川平四郎元駐中国大使夫妻が、私どもの懇望にこたえてハーバード大学へも講演に来られ、ベンジャミン・シュウォルツ、エズラ・ヴォーゲル両氏をはじめ米

国きっての中国学者との討論を通じて、米中国交樹立の近いことを力説しておられた。[34] その冬、十二月十六日、ワシントンと北京で、国交樹立の同時声明が行われ、一挙に流れが変っていったことは記憶に新しい。

そのような激流の兆しを、九月の段階で、米国在住の客家人が知らなかったとは考えられない。実際、サンフランシスコ市崇正会は大会を目前にして激しい内部討論を繰返した後、新会長に中立派の陳樹桓氏を選出している。もとはといえば、同会の創立五十周年を祝う記念行事として世界大会を引受けることにしたのであるが、米中接近の新状況のなかで、親共、反共はもとより、台湾独立派をもふくめて、中華世界の未来像に関する各種各派の対立があからさまとなり、米国政府の動向に明るい陳樹桓氏が、反共の李煥然前主席にとってかわり、ユニークな方針を打出すこととなった。[35]

すなわち、居住国である米国の立場を尊重して、米国とその国民に不利となるような政治的発言はもとより、いかなる政治色をも世界大会の会場には持込むべきでないことを、開会の辞で断言したのである。

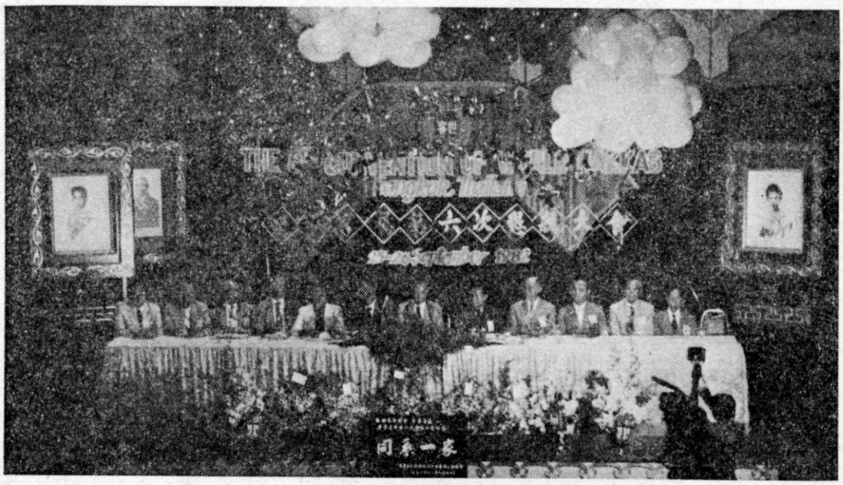
もしも政治的発言を望むのであれば、会場の外で個人として発言せよ、会場内では、政治以外の話題にかぎって自由発言を認める、という親睦第一の路線を明確にした。

さらに、従来の大会で掲揚されていた青天白日旗を、会場正面中央からはずして一隅に移し、中央には、中国統一・国共合作を実現した孫文の肖像を掲げることに踏みきった。

このサンフランシスコ大会の原則は、第五回の東京大会に継承され、非政治三原則として発展させられている。

すなわち、①政治に関与しない、②会員個人の思想に介入しない、③国籍を問わない、という三原則である。

いかに原則をつらぬき、各地区代表の本心にもさからわないように会を組織し運営するか、ということが、主催団体の究極のつとめであるが、実際には、各地区の代表から成る団長会議によって民主的に決定される。たとえば、政治に関与しない、という第一原則について見ると、日本では、孫文肖像を超政治的な民族統一の象徴として掲げることに衆議一決し、会場中央正面に堂々と掲げられ、開会と閉会の際に、この肖像に対する三拝の敬礼も行われた。



世界客属第六次懇親大会の議長団。舞台正面左右にタイ国王ならびに王妃の写真，その左斜め奥に孫文像，正面中央に「同系一家」。（筆者撮影）

しかし、タイでは、事態はそれほど単純ではなかった。バンコックのナライ・ホテルの会場正面には、左右にプミポン国王と王妃の写真が掲げられ、奥の中央には「世界客属第六次懇親大会」の文字と「世客」のシンボルマークがあるのみで、孫文像は、向って左側、国王の写真の斜めうしろに、半ば隠れるように掲げられていた（写真参照）。

このような配置に決まるまで、開幕前夜の深更におよぶ三時間余の激論が、団長会議でたたかわされた、という。

論争は、台湾代表が孫文を「救国」の恩人と称揚したことに端を発する。タイの崇正総会を代表する邱細見会長が、「救国」とは何かを問い直したのである。救国の方法は、所詮、政治である。共産主義か、三民主義か、という問題だけではなく、君主制か、共和制か、という問題もある。台湾代表にとって「救国」の象徴とされる孫文は、いかに客家の大先達とはいえ、君主制を否定して、共和制を開いた人である。そのような人物を、君主制のタイ国に生き、国王を大切に思うタイの客家が「救国」の主として仰ぐわけにはいかない。民主といえば共

和制、とは限らないのであって、王制のもとでの民主制も立派に成立しているのではないか。この王国、タイで客家が生活するからには、タイの国制を尊重しなくては幸福は得られない。台湾で孫文を崇敬することが幸福への道であるのと同様に、タイでは、国王に敬礼することが先決なのだ。――このような邱細見会長の論理に対し、台湾代表は、三百人の代表団の一斉引揚げも辞さぬ勢いで反論し、結果においては、日本崇正会の提起した「合理的方案」の線で、前述のような写真配置におさまった、という。

また、国旗問題については、バンコクでは世界客族総会旗と主催地のタイ国旗が壇上に飾られた他、一切の「国籍を問わない」方針に沿っていかなる国旗も掲げられなかった。

前回の東京会場では、舞台前面に参加代表の意向を尊重して、三人以上が参加した団体に限って、その団体の希望する旗を並べることにした。結果として、五星紅旗は見あたらず、青天白日旗が飾られていたため、二、三の新聞報道は、原則を貫徹しない妥協、と批評し、統一の悲願かなわず、と論断した。しかし、主催者にその間の事情を踏みこんで質問したところ、論理は次のように一貫していたのである。

サンフランシスコでの政治的中立の芽を伸ばし、東京では、「北京」の名札を胸にした客家人も、台湾代表と同席し、共存の時代にふさわしい大会となった。北京からの参加者は、東京大学胸部外科で研修のため来日中の医師、傅尭箕氏であった。[36] ただ、他にも二名の参加予定者がいたのだが、ついに出席できず、結局、北京からは一名だけで、団体を構成する三人の条件を満たせなかった。そのため、五星紅旗掲揚の機会が失われたまでである。一方、台湾側は、団体構成の要件を満たして余りある大型代表団を派遣しており、その希望に沿って青天白日旗を飾ることになったが、あくまでも団体の象徴旗として遇したのであって、国旗扱いはしなかった、という。このことを不満として、台湾代表団は、国旗としての大旗掲揚を求めたが、主催者側としては、サンフランシスコ原則にのっとり、会場内に政治すなわち国旗を持込むことは認めない、という方針をつらぬいた。

東京会場となった品川のホテルパシフィックに対しては、門外に星天白日大旗を掲げたいとの意向が台湾代表

団から表明され、両者で協議の結果、実現を見なかった、と聞く。ただし、閉会式の宝塚会場では玄関の外に大旗が掲げられたが、これは、東京よりも大阪の方が地縁的・経済的に台湾と密接な関係があることのあらわれであろう。

このような日本での総会の経験をふまえ、三原則を継承して、主催国以外の国旗は一切掲げず、各国・各地区代表のアイデンティティの象徴を、民族的国旗から世界客属総会旗に昇華させたバンコク大会の決定は、そこに結集された全世界の客家の指導者たちの智恵の産物と評してもよいであろう。

五　未来――「華」による連帯は可能か

洛陽のあたり、河南の古典文化の中心地から南遷し、「夷狄」との斗いを通じて「中華」の自覚をつよめ、移動さきの華南の少数民族や漢族先住民との摩擦のなかで、漢民族の正統という意識をつちかってきた客家人は、県境・省境・国境をこえ、世界の中の「華」の民としての統合を実現しつつある。

華僑から華人へ、仮寓から定住へ、という現地化の過程が進むにつれて、その発展の最先端を行くシンガポールなどにおいては、客家の文化的統合の核である客家語の次世代への継承が困難となり、華語から英語への移行が加速されはじめている。[37]

「華」すら乗りこえようとしているシンガポールのリー・クワンユー首相は、周囲から客家出身の華人とみなされながらも、みずからはシンガポーリアン以外の何ものでもないと主張して譲らない。また、中華人民共和国の指導陣を見れば、葉剣英・鄧小平・廖承志各氏、故朱徳・郭沫若・陳毅各氏が客家人であることは、しばしば話題にのぼっているにもかかわらず、故毛沢東氏の見解が出されてよりこのかた、[38]客家とか福建とかいう区別は封建遺制の地方主義であるとしりぞけられ、原則論としては「中華」の坩堝に溶融されてすでに久しい。

かえりみれば、華僑といい、華人といい、「中華人民共和国」にせよ、「中華民国」にせよ、どこまでも生き延びるかに見える「華」は、これからさきのグローバルな、あるいは宇宙的な人類の新時代において、[39]何処へ行こうとするのであろうか。そのような「華」をすら乗りこえはじめている華人客家系宰相の指導するシンガポー

ルにおいて、二年後、一九八四年秋、第七回の世界客属懇親大会が開かれる予定になっている。

すくなくとも、バンコク大会の閉会式において、南洋客属総会代表・嘉応五属同郷会会長の卓済民氏は、二カ月の検討期間の猶予を条件として、次期シンガポール主催の線で、一応、大会旗を継承した。

第三回大会の前例もあり、もしシンガポール大会が実現しなければ、再び総会預りにせよという動きも一方にはある。そのような勢力は、第四、五回、そして六回への推移を後退と見て、失地回復のための努力を傾注するにちがいない。

他方、シンガポールの国内事情を眺めれば、客属はマイノリティであるのみならず、旧来の民族主義は歓迎されそうもない。国際関係を見れば、対中国政策の全く異るマレーシアとインドネシアという両隣国との歩調をどのように整えて世界大会に取組むか、という難問もある。

世界組織の側から見れば、バンコク大会に欠席し、沈黙を守る香港崇正総会（黄石華会長）の動向にも、未知の要素が多い。バンコク大会の終了直後に、同会が香港で懇親会を開催し、大会からの帰途におもむく各国各地区代表に招待状を送っている事実は、[40]積極的な影響力の行使のあらわれなのか、あるいは、批判派としてのスタンスを保つためと見るべきなのか、今の私には不可知である。

もう一つ不分明なのが、北京の華僑政策のなかでの客家の位置づけである。

しかし、にもかかわらず、実感として理解できることは、現在の世界客属総会の指導幹部にあたる世代にとって、故郷の山河と風物、習慣、おふくろの味としての客家料理への郷愁は、離郷の体験なくしては想像することもできないほど深いものであろう、という心情である。

日本崇正総会が、大会記念に特別出版した『中華舊礼俗』の美事な手稿本も、[41]そのような超政治的心情を抜きにして語ることはできないであろう。いうまでもなく、郷親離散の重大な原因となった日本の対中国関係史の総体に対する客家人の心理を前提としてのことであるが。[42]

(1)　海外へ移住した中国人のうち、国籍が中国（大陸・台湾）にあるものを華僑といい、移住地の現地国籍を取得したものを華人という。

(2)(3)(4)　拙稿「華人社会と客家史研究の現代的課

題」（戴国煇編『東南アジア華人社会の研究　上』アジア経済研究所、一九七四）。

（5） 小島晋治『太平天国革命の歴史と思想』研文出版、一九七八、等。

（6） Mantaro Hashimoto, *The Hakka Dialect, A Linguistic Study of Its Phonology, Syntax and Lexicon*, Princeton-Cambridge Studies in Chinese Linguistics, Cambridge University Press. 1973. 橋本萬太郎「客家語のルーツ」（『客家之声』第四号、一九七九年一月号、アジア政経学会・現代中国研究叢書XVII『客家論の現代的構図』同会、一九八〇再録）。

（7） 須山卓・日比野丈夫・蔵居良造『華僑（改訂版）』NHKブックス、一九七四。

（8） 内田直作『東洋経済史研究I』千倉書房、一九七〇。

（9） 羅香林『客家研究導論』シンガポール南洋客属総会、一九三九、邦訳、一九四二。

（10） William G. Skinner, *Chinese Society in Thailand*, Cornell University Press, 1957. ウィリアム・スキナー著、山本一訳『タイの華僑社会』バンコク日本人商工会議所、刊行年次の記載なし。

（11） 香港崇正総会編『金禧大慶・世界客属懇親大会・大厦落成・紀念特刊』同会、一九七一、等。

（12） 内田直作「華僑社会の生成と発展」（『地域研究講座・現代の世界3・東アジア』ダイヤモンド社、一九七〇、拙稿「受難の華僑史――新たな定住への展望――」（トヨタジャーナル『自動車とその世界』一九七四年十月号）。

（13） 根岸佶『華僑襍記』朝日新選書三、一九四二。

（14） 宋明順「埋もれた客家――南洋の河婆人――」（日本崇正総会『客家之声』七、一九八〇）。

（15） 南洋客属総会『客属年刊・銀禧紀念号』同会、一九五六、同会『南洋客属総会第卅五・六周年紀念刊』同会、一九六七。

（16） 註（11）に同じ。

（17） 『世界客属第二次懇親大会実録』世界客属第二次懇親大会実録編輯委員会、一九七四。

（18） 『中原日報』バンコク、一九八二年九月二七日付。

（19） 『三藩市崇正会金禧慶典・世界客属第四次懇親大会・特刊』同編輯委員会、一九七八。

（20） 日本崇正総会『客家之声』八、一九八二、同会『世界客属第五次懇親大会記念特刊』同会、一九八二。

（21） 註（18）に同じ。筆者の見聞。

（22） 戴国煇氏の著作のうち、特に以下を参照。『日本人との対話――日本・中国台湾・アジア』社会思想社、一九七一、「一九七〇年代の華人（華僑）問題」（アジア経済研究所広報部『ゼミナール講演要旨』第一集、一九七二）、『日本人とアジア』新人物往来社、一九七三、『境界人の独白――アジアの中から――』龍渓書舎、一九七六、『台湾と台湾人――アイデンティティを求めて――』研文出版、一

九八〇、『華僑――「落葉帰根」から「落地生根」への苦悶と矛盾――』研文出版、一九八〇、「第三次国共合作の可能性を分析する」（『日中経済協会会報』一一〇、一九八二年九月）。

（23）「東京崇正公会参加世界客属第六次懇親大会代表団」（邱進福団長、李寿煇・廖号景・徐徳郎・魏湘茂各副団長、邱源岳秘書長、曾煥勲副秘書長、総勢五六名）は、一九八二年九月二四日に成田を発ち、同二五～二七日バンコクの大会に参加し、以後二九日までシンガポール、同十月一日仲秋節まで香港を歴訪、同日正午、台北において解散した。

（24）註（6）所掲の『客家論の現代的構図』参照。本書は、アジア政経学会の板垣與一・石川滋・衛藤藩吉諸教授の高配により筆者が編集を依頼されたが、編者不徳の故に、遅延のうえ多くの誤植を残した。将来、何らかの形で改訂して貰いたい。

（25）小野和子『中国女性史――太平天国から現代まで――』平凡社、一九七八。

（26）註（2・3・4）拙稿、同じく「唐末梁初華南の客戸と客家盧氏」（『社会経済史学』三三ノ五、一九六七ならびに周達生「客家文化考――衣・食・住・山歌を中心に――」（『国立民族学博物館研究報告』七ノ一、一九八二）。

（27）林耕『謎の民族・客家と山歌』上海・揚子江社、一九四四、正田満枝「客家民謡所感」（アジア文化総合研究所『アジア文化』五、一九八〇）、田仲一成『中国祭祀演劇史研究』東京大学東洋文化研究所、一九八二、等。

（28）拙稿「中国・東南アジアにおける客家の歴史的位置について」（『一橋論叢』六九ノ四、一九七三）、Han Su-yin, *The Crippled Tree; China, Biography, History, Autobiography*, Jonathan Cape, London, 1965、ハン・スーイン著、長尾喜又訳『悲傷の樹――自伝的中国現代史1――』春秋社、一九七〇、等。

（29）註（11）等。

（30）拙稿「フリーメーソンの二つの塔」（『創文』一八三・一八四、一九七九）、同「フリーメーソン――その歴史と現状を探る――」（『音楽の友』一九七九年九月号）。

（31）註（29）に同じ。

（32）註（2・24・29）等。

（33）香港崇正総会から日本崇正総会に寄せられた公式招聘状の表紙は、メーソンとフランスの三色旗を想わせる白地に藍・紅両色の縁取りつきである。会長は、集団指導型で、黄石華・鄒琳・胡仙・黄福祺・林翼中・古勝祥・黄麟書・陳日新・胡陳金枝・陳国鈞・周有・古道誠・李茂機・陳漢宗諸氏の連名、理事長は黄石華氏、監事長は陳漢宗氏である。世界の客家ネットワークにおける「台風の眼」である。しかも、タイ国王への敬礼と対応するかのようなセレモニーがある。すなわち、①斉集、②就位（主席団、各位首長、嘉賓）、③粛立、④向中英国旗及　国父遺像行三鞠躬礼、⑤理事長黄石華先生致詞　…となっている。英国女王、で

はないにせよ、国旗が特記され、孫文像敬礼と両立している点、留意せねばなるまい。

(34) 拙稿「哈仏大学燕京学社の春秋」（『東方学』五八、一九七九）。

(35) 註（19）に同じ。

(36) 『朝日新聞』一九八〇年十月十一日、座談会「民族統一への思い新た―華僑〝客家〟世界大会をふり返って―」。

(37) 華文教育の牙城であった南洋大学も、ついに英文本位のシンガポール大学に統合された。

(38) 毛沢東「井崗山の闘争」（『毛沢東選集』一）。

(39) 拙著『巨大技術の時代が来た！――マクロエンジニアリングの挑戦――』PHP研究所、一九八二）、フランク・P・デビッドソン、中川学編、菊竹清訓・長友信人監訳『マクロエンジニアリング〔巨視的創造科学の方法〕』東海大学出版会、一九八二、拙編「地球大改造計画のスーパー・サイエンス」（『OMNI・日本版オムニ』一九八三年一月号）、等。

(40) 註（33）に同じ。

(41) 第五回世界大会を主催した日本崇正総会は、橋本萬太郎氏がバーゼルの福音協会で発掘した手稿本・梅県黄塘張祖基編『中華舊禮俗・一―四』を記念出版し、各国の客家代表に献呈した。

(42) 第六回世界大会の席上、在日客家を代表して発表された東京崇正公会会長・邱進福団長の演説全文を以下に収録、日本人の側からの省察のよすがとしよう。

世界客屬總會第六次懇親大會
日本代表團的報告

日本崇正總會副會長兼團長
東京崇正公會々長
邱進福賀詞

大會主席、各位貴賓、各位團長、各位客屬同胞們：

今天在建都兩百週年的曼谷、舉行世界客屬第六次懇親大會各地客屬鄉親歡集一堂、敦睦友誼、互相鼓舞、眞是表現了客屬的團結奮鬪精神、本人今天能參加這樣盛大的懇親大會、內心感覺無限的榮幸。

回想兩年前、在日本舉行第五次懇親大會時、各地的客屬父老長輩兄弟姊妹一千多人、不辭遠路、踴躍參加、使得日本懇親大會得到非常豐碩的成果、因而揚名全球的華僑各界、也由於大會的成功、留日客屬會的聲望及留日客家人的地位、提昇不少、我謹代表日本崇正總會、向各地客屬鄉親、申致誠摯的感謝。兩年前在日本實爲招待不週、誠感歉疚、借此機會向各位致十二萬分的歉意、並向各位問候請安。

現在僑居日本的華人有五萬多人、其中客屬籍者僅有五千人左右、客屬的團體組織有：東京崇正公會・關西崇正會・名古屋崇正會・西日本崇正會・以及上述四個團體聯合組成

之日本崇正總會。總會的會長、現由邱添壽先生擔任、會員的職業、以醫生・教師・文化・工程等事業者爲大多數、其他如開設大飯店・餐飲業者約占五分之一左右。

當前我們的祖國、受客觀環境因素影響、形勢尙未能安定、因爲祖國未能統一、未能强大、我們僑居日本、創業、子女教育、就業等問題、受到種種的困難、例如這次到泰國、星加坡・香港・臺灣等地方開會旅行、持有日本國護照者、只須兩張相片、而持有中國護照者、確要十三張相片、同樣居住在亞洲地區、而有此差別、所以留日的客屬同胞們、在此環境的逼迫下、歸化日本國籍者、超過半數以上、如此而來、不久的將來、留日客屬會、定會變成有名無實、終爲消失。所以期望我們的國家團結壯大、這不只是留日華人同胞的願望、也是全球二千五百多萬海外華人的最大期望、中國人口已超過十億人、然而近百年來、常受外國的侵略、至今不能排上先進國家之列、此乃中華民族雖有十億餘人、却不能精誠團結、如是一盤散砂之故。

近來國際情況、複雜怪異、像日本發生教科書歷史內容的改變、因爲日本政府的認識不淸、處理不當、引起亞洲各國的反抗與不滿、而引起外交上的阻碍、但日本國內對這問題亦分裂三派、軍國主義和社會主義兩派者占少數、而現在的鈴木首相政權、已經聲明兩次：第一點、日本軍侵略中國及亞洲各國損害非常慘重、對這些事件、日本政府、當有反省、不得再有歷史重演、對不起亞洲各國。第二點、教科書上、有錯誤事實、兩年內一定要訂正改變。第三點、卽刻命令教科書審查會將來審查各件、定要考慮鄰國的民情。以上是日本政府對教科書問題處理的基本方針。鈴木首相今訪問北京、教科書問題、可能有所解決、而我日本崇正總會、非常重視這一問題、因此以我們發行的「客家之聲」報紙上、嚴重提出抗議日本政府改變歷史、侮辱中國的史實、並要求日本政府立卽訂正及修改、本總會雖是一個小小的團體、但是本着客屬同胞傳統的愛國心和愛民族的精神、絕對不落人後。

我們無論在國內或國外、要繼承客屬先賢先烈的義勇報國精神、發揚中原先人開拓創造的氣魄、推展國父孫中山先生所倡導的三民主義、建設一個自由・民主的現代中國、以三民主義統一全中國的願望能早日實現。

世界客屬懇親大會、已經開過五次、成果豐碩、尤其客屬的經濟文化得以交流、此乃歷屆懇親大會最大的成果。今天本人謹代表日本崇正總會所有會員同胞、向主辦單位泰國崇正總會致最崇高的敬意。

以上簡單報告、敬請指教、預祝大會成功、並祝各位身體健康・事業順利、謝謝各位。

一九八二年九月廿六日於泰國曼谷

（補註）本稿の脱稿後、内田直作『東南アジア華僑の経済と社会』（千倉書房）が刊行された。あわせて参照されたい。

（一橋大学教授）